国際児の社会化

— 言語的社会化と兄弟姉妹差を中心に —

新田 文輝

Key words : 国際結婚、国際児、社会化

1. はじめに

国際間の政治、経済をはじめとする多方面の相互依存、交流が一般化した現在、日本人の国際結婚も多くなった。1975年以降における日本における国際結婚の一つの特徴は、男性の方が女性より多いことである〔Nitta, 1988, 新田, 1995, 厚生省, 1994〕。これらの国際結婚カップルのほとんどがこどもを持つと思われるので、国際児の人口も徐々に増加するであろう〔Hara et al., 1994〕。言語や習慣の違いから起こる問題は当然どの国際家族も遭遇するのだが、母親が外国人の場合、日本人の場合と比較して相対的に子育てや教育に関しての問題が生じやすい。それが日本とは言語も習慣も異なる欧米人の場合は特にそうである。

国際結婚の増加が進むにつれて、それに関する研究や本も多くなり一般向けのジャーナリスティックなものからより学問的なものまで、多くの出版物が見られるようになった〔新田, 1992, 佐藤, 1989, 宿谷, 1988〕。また1995年度の日本家族社会学会における国際結婚家族をテーマとするセッションで研究発表が行われ、本誌でも国際家族に関する論文が特集されることから一般的興味の深まり、学問的重要性がうかがえる。しかし、国際結婚に関する研究や出版物のほとんどは、国際カップルに関するものが多く、国際児についての研究は比較的少ない。また最近の出版物は日本人男性と結婚した外国人女性に関するものが多く、しかもそのほとんどは彼女たちの「花嫁」、「妻」としての問題を取り扱っており、「母親とこども」に関するものは少ない。

本論では、国際結婚家族における子育て、教育に関する諸問題を検討するが主な目的である。中でも、様々な問題が特に顕在化しやすいと思われる日本人父親とアメリカ人母親を持つこどもたちに焦点をあてて、家庭内外でみられる言語的社会化、兄弟姉妹間の差異、学校教育上のいくつかの問題を検証する。

2. 研究の背景

本論で使用したデータは53の国際結婚家族から得たもので、家族の過半数が「外国人妻の会」(The Association of Foreign Wives of Japanese)の会員である。調査家族の大多数(N=44)は父親が日本人、母親がアメリカ人の家庭で、関東地方を中心に関西と九州地方に住んでいた。残りの家族の母親の国籍はオーストラリア、ドイツ、メキシコ、スウェーデン、スイスが各一人ずつとイギリスとカナダが二人ずつの計9名である。

調査方法は、一年間(1984-85年)のフィールドワークを通じておこなった聞き取り調査が中心で、

他に参与観察とアンケートをも併用した。インタビューは全て家族の了承を得て録音し、参与観察では10組の家庭に泊まらせてもらい、また数人の国際児と一緒に彼等が通う学校へ行って授業その他を観察した。本論では量的データに加えて、質的データをも提示し、問題点のより深い質的理解に努めた¹⁾。

3. 社会化と国際児

社会化とは「有用な社会の成員として、また健全な集団のメンバーとして受け入れられるよう、各人に必要な知識や技術、そして内面的性向を植え付けるプロセスのことである」[Goslin, 1969: 2]。家庭内の社会化プロセスにはそれを行う親たちとそれを受けるこどもがおり、実生活を通じて、こどもは様々な事柄を身に付けていく。親も社会化を行う agent として単に子育て、教育に能動的に作用するだけでなく、それを通じて自らも社会化のプロセスを受ける。つまり、社会化プロセスは、当事者間で起きる相互作用であり、親もこどもから感化を受けるとされている。しかしながら、社会化はその当事者間での相互作用だけでなく、こどもの間でも起こることにわれわれは留意すべきである。

社会化または、人間が一生にわたって経験するプロセスであるが、本論ではとくに国際児の青年期前に焦点をあてる。このプロセスは個人の成長段階に従って様々な社会的レベルで起こり、誕生数年後の初期段階では、家庭で主に母親が中心になって行われる。しかしながら、それには父親や兄弟姉妹も何らかの形で関与していることも忘れてはならない。こどもが幼稚園や小学校へ通う年齢に達すると、教師をはじめピア・グループと呼ばれる同年代の他のこどもたちの直接的、間接的影響も無視できない。

4. 家庭内での言語的社会化

ここでは言語的社会化に焦点を合わせたい。言語的社会化とは、個人が成員として必要とされる集団の言語を習得する過程である。Schmidt-Mackay [1977: 132] は国際家族のような多言語家族の対人関係においては付加的な次元があると主張している。国際家庭では単にある社会の一言語（母国語）を無意識に学んで使用するのではなく、成員が意識的に「家庭内のことば」を選ぶことができるのである。また国際家庭では家庭内バイリンガリズム（二言語併用）が一般的であり、特に家族成員が夫婦二人だけの結婚初期の段階にあっては、外国人の配偶者が往々にして相手の言語を学習しなくてはならない。

以上のことから国際家庭では、言語にまつわる問題が起こりやすい。例えば、米軍兵士と結婚し、アメリカへ渡ったいわゆる戦争花嫁などの日本人女性を調べた DeVos は、彼女たちの間で言語上の問題点が多いと報告している [DeVos, 1973]。またより最近では、日本とナイジェリアにおける国際結婚家族の調査をしたイマムラも、日本でのこどもの教育上最も大きい唯一の問題は言語であると結論している [Imamura, 1982]。

ここでは、国際家族内での言語的社会化に関する諸問題を考察するのだが、その際フィッシュマン [Fishman, 1965] が唱えた「誰が、何語で、誰に、いつ、話しかけるか」という二人の話者を一対とする分析単位の観点から考察するのが妥当であろう。これは多言語会話にあっては、一人の話者の発話に対してもう一人の話者が必ずしも同一の言語で応じるとは限らないからである。

(1) 親のこどもに対する言語能力の期待

大多数の調査家庭にあっては、夫婦間では英語が共通の言語であった。その一つの理由は、英語が「出会いのことば」だからである。つまり、二人が知り合った時、大多数のカップルが英語を通してであった。第二の理由は、通常日本人の夫の英語能力と外国人妻の日本語能力を比較すると、夫のほうが高いことがあげられよう。このような言語背景の家庭環境では、最初のこどもが生まれた後、それぞれの親は何語でこどもと接しているのであろうか。この疑問に答える前に親たちのこどもに対する「言語政策」とでも呼ぶべきものを見る必要がある。

端的に述べれば、大多数の親はこどもがバイリンガル（二言語併用者）になることを望んでいる。これは調査家族のうちバイリンガルのこども数をみれば明らかであろう。調査家族には合計124人のこどもがいたが、その過半数は何らかのバイリンガルであった（表－1 参照）。表－1で、能動的バイリンガルとは二つの言語を聞き、話すこともできる二言語併用者をさし、受動的バイリンガル〔Lincoln、1975〕とは第二言語を聞いてわかるが、話せないような二言語併用者を意味する。言語使用以前とはこどもがまだ乳幼児でことばをよく使えない状態にあることをさしている。

表－1 こどものバイリンガル能力

能動的バイリンガル	6 5	(5 2 %)
受動的バイリンガル	4 3	(3 5 %)
日本語モノリンガル	1 0	(8 %)
英語モノリンガル	1	(1 %)
言語使用以前	5	(4 %)
合 計	1 2 4	(1 0 0 %)

表－1でわかるように、調査した国際児のうち、能動的、受動的バイリンガルあわせて87パーセントにもおよぶこどもたちが二言語併用者であった。この背景には何があるのであろうか。一つには母親たちの強い願望、期待感である。外国人母親のこどもに対する言語能力に関する期待感はつぎのイレーン²⁾のことばからも理解できるであろう：

二文化家族というせっかく恵まれた環境でこどもを育てているわけですから、少なくともバイリンガルのこどもを育てたいと思っています。そうした努力がらいしなければ、本当にもったいないし、知力の無駄という気がします。自分の子が英語だけしか話せないとか、日本語だけしかわからないというのはいや。こどものうちだから両方うまくやっていけるのであって、大人になってから別のことばをマスターしようと思っても、なかなか出来るものではありません。

もう一人の母親、デニースもつぎのように述べている：

言葉について言うなら、少なくとも、ブローケンでもいいから、もう一方の親と会話できるように習得し、身につけてもらいたいと思います。家の中で言語をひとつしか使わないというのではなく、別のことばで何か言えるようにさせておきたいと思っているのです。

では実際、親たちはどのようにこどもたちと接しているのでしょうか。最も一般的なのは「一親一言語」[Grosjean, 1982]とよばれるパターンで、それぞれの親が自らの母国語でこどもと接するものである。

(2) 母親とこどものコミュニケーション

ほとんどの日本人父親はこどもと日本語で接していたが、外国人母親の場合はどうであろうか。大多数の母親たちはこどもをバイリンガルにそだてるために意識的に彼女たちの母国語で話しかけていた。これは、10年以上もの長い間日本で生活し、従って日本語がかなり流暢に出来る母親でも同様であった。例えば、三人のこどもの母親で、日本在住20年のパーバラもその一人である：

私は日本語がよくわかりますし、使うのも苦になりません。でもこどもたちに対しては意識して一生懸命英語で話しかけるようにしています。

パーバラと同じように日本語を流暢に話すキャロルも意識的に英語で二人のこどもたちと接しているが、その経緯をつぎのように述べている：

こどもができる以前にもずいぶん（夫と）話し合ったんですけど、私自身の場合、自分のことばでない日本語でこどもに話しかけるなんて、想像もできないことでした。

勿論、母親たちがその母国語でこどもに接するのは、そのほうが容易で、気楽だからである。しかし、それは単に言語学的に容易だからというだけではない。そこには、自分が持っているものをこどもに伝えたいとする心理的なものがある。このことについて、パーバラはつぎのように述べている：

私にはこどもに与えたいと思うもの、伝えたいと思うものがいろいろあります。多分それは自分が親から受け継いだもの、あるいは自分の全存在だとも思うのです。母と子の在り方、関係もそうですし、ユーモアもそうです。それからアメリカの音楽も、あるいは、もう、なにもかも...

パーバラが言及しているのは、文化に深く根ざしており、当然自らの母国語に拠らなければ達成できない事柄である。このように見て来ると外国人母親にとって、自分の母国語で子育てをするということには強い情緒的、心理的なニーズが存在しているのがわかる。ここではそれを情緒的要素（affective factor）と呼ぼう。しかし、国際児をバイリンガルに育てようとする背後にはその他にも一つ別の社会的要素がある。それは、先見的要素（anticipatory factor）とでも呼べるもので、国際児の将来へ

の考慮に基づくものである。

この第二の要素の裏には、国際児は将来就職する時に差別を受けるのではという懸念が親たちの間にある。もし国際児がバイリンガルであれば、それが大きなプラスとなって、就職にも有利になるのではと考えるのである（性差別の節を参照）。

(3) 日本語による子育てに伴う問題

国際家族によっては、外国人母親がこどもを日本語で育てるという状況にあった人も少数ながらいた。そのようなケースでは、母国語による子育ての重要性和日英両語の違いから生じる社会言語学的問題がより鮮明になった。例えば、三人の幼いこどもを持つパットの場合である。彼女は英語が全くできない義母と同居していた事情もあって、結婚後数年の間家庭内では日本語だけを使って生活していた。その時の経験をパットはつぎのように話している：

こどもに何か日本語で言おうとしても、それが本当に自分の言いたいことなのだろうかと、よく考えこんだものです...どうも自分の言いたいこととどこか違う。こどもに本当に言いたいことを表現しきれていない。そんなもどかしい感じがしたのです。それから、もう一つ私が思ったことは、日本語ではこどもたちに「I love you」が言えないことでした。私の周りには日本語があふれるほどありましたが、このほんの三つのことばを表す日本語、母親としてどうしてもこどもに言いたいことばを探しだすことが出来なかったのです。ですから、こどもに初めて使った英語がこの「I love you」だったのです。

日本語が流暢なアメリカ人でも、日本語では十分に表現することが出来ないことが多い。その最も良い例が愛の表現であろう。日本社会では男女間に限らず、母子間でもことばによる愛情の表現はあまりなされないのが普通である。Hallによると、日本は高コンテクスト文化の典型で、そこでは言語コードの使用が制限されており、その変わりに伝達されるメッセージは受け手と状況の中に組み込まれている〔Hall、1977〕。従って、愛情などの言語的表現はあまり必要がないのである。パッシン〔1980〕も指摘しているように、伝統的に「愛」やそれに類似した心情を欧米人のように頻繁に言語で表現しない日本社会では、厳密に「I love you」に相当することばは存在しない。このように見てくると、英語を母国語とする外国人母親が日本語を使って子育てをすると、ことばによる愛情の表現がむずかしくなることがわかる。これに関して、パットは続けてつぎのように述べている：

私が言いたいこと、こどもに是非わかってもらいたいことは「I love you」だったのです。「かわいいね」でも「お利口さんね」でも、その他のことばでもなかったのです。私の愛を受けとるのに、こどもは何もする必要もありません。ただ、私の「I love you」を全身で聞いてくれればいいのです。

このように、英語を母国語とする母親が日本語だけでこどもと接しなければならないような状況に陥ったり、また自らそのような課題を課したりした場合、こどもへの十分な愛情の言語的表現手段が奪われるような事態になることがわかる。

(4) 異言語会話

こどものバイリンガル能力の調査結果（表－１）で示したように、国際児の52パーセントが能動的バイリンガルであるのに対し、35パーセントが受動的バイリンガルであった。従って、このような受動的バイリンガルの国際児と母親との間での会話は前者は後者の英語に対して、日本語で反応するのが一般的である。日本語と英語のように全く異なった言語を同時に使って会話をした場合、意志の疎通などに支障はないのであろうか。

二人の話者がそれぞれ異なった言語を同時に使用する会話形態をここでは異言語会話と呼ぶことにする。私はフィールドワークの間、インタビューのほとんどを調査家族の家でさせてもらったが、その一つの目的は、家庭環境の観察であった。そして、その初期段階で、母子間の異言語会話がかなり一般的に行われていることに気がついた。この会話方法は日本語または英語しか使用しない普通の一言語使用者にとっては異様に聞こえるかもしれないが、ある母親が言っていたように極めて「自然に行われる」会話形態である。ここでは、二つのケースをあげて異言語会話の実際を簡単に考察する。

事例１

この事例では幼稚園児のケン（６才）が英語でインタビュー中の母親に突然日本語で話しかけるところから始まる。

子 あのべんとうばこはやめてよ、ママ。あのべんとうばこはやめてよ。

母 Why?

子 だって、みんなね、ケン君これ好きなんだとかいうから、いやだ。

母 Why don't you change it to another one? You said it was too big. You look for the one you like. Then, you show me the one you like. But, Ken, you unpack your *obentobako*. Put it to be washed.

子 いやだ。

この事例でわかるように、二人はまるで一つの言語を使っているように、流暢に会話をしている。それは、ケンが母親が使った最初の *Why*（疑問詞）と二番目の *Why don't you...*（提案）との違いをはっきり理解していることから明らかであろう。

事例２

第二の事例では、15才の息子と母親がアメリカの税金について話しをしている。

子 一度払ったらもう、あれ？

母 Uhh, no, not necessarily. But, anybody (who) lives in America, and anybody who works in America and makes money pays, whether you're American or not...Your father paid taxes in America.

子　なんで。
 母　Uh, when he worked there.
 子　えっ。
 母　Papa has a Social Security Number.
 子　えっ。
 母　Before we were married.
 子　働いたことあるの。
 母　うん。
 子　知らなかった。

ここでも、会話の流れは流暢で途切れることはない。七行目と九行目の息子の「えっ」は、母親の英語がわからなくて聞き返しているように思えるが、そうではなくて母親から初めて知らされた父親のアメリカでの経験に驚いているのである。

以上二つの事例からわかるように、異言語会話ではなんらの明らかな支障がなく、あたかも一言語で行われているように自然に会話が進んでいることがわかる。

(5) 兄弟姉妹間のバイリンガル能力差

フィールドワークの間、面接調査や参与観察をするたびに、兄弟姉妹の中で年が上のこどもの方がバイリンガル能力が高いという印象を受けた。インタビューでも、親たちは兄弟姉妹間での言語能力差についていろいろ話しをしてくれた。また、フィールドワーク終了後の統計的処理でもそれを数量的に裏付ける結果となった。

表－２　出生順位とバイリンガル能力の関係

出生順位	能動的バイリンガル	受動的バイリンガル	合計
1	3 6	1 5	5 1
2	2 4	1 4	3 8
3	5	1 4 *	1 9
	6 5	4 3	1 0 8

*第三子以下はすべてここに含めた。

$$\chi^2 = 6.25$$

ピアソンのカイ二乗テストの結果によると、 $P < 0.05 \chi^2$ で、出生順位とバイリンガル能力（能動的か受動的）の間に関連性があることがわかる。

表－２から一番上の子が能動的バイリンガル、末っ子が受動的バイリンガルと言うケースがかなり多

いことがわかる。そのような家庭では上の子が英語で母親と会話するのに対し、二番目、三番目の子どもたちは母親と異言語会話をするというパターンが見られる。フィッシュマン [Fishman, 1965] によると、このような兄弟姉妹間のバイリンガル能力差はアメリカの移民家庭でも見られる現象である。

このような現象がおこる要素の一つとして考えられるのは、母親が子どもと過ごす時間的なものである。子どもが一人の場合母子で一緒に過ごす時間は最大であるが、子どもの数が増えるに従って、母親がそれぞれの子と過ごせる質的時間は減少するからだ。もう一つの要素は、兄弟姉妹間で使われることばが日本語であるという言語的なものである。すなわち、第一子がたとえ能動的バイリンガルであっても、弟や妹たちとは日本語で日常会話をするのが一般的であるからだ。

5. 国際児の学校教育

(1) 学校選択

一般的に、子どもが乳幼児の間は母親との関係が密接であるから、それだけ母親の影響も直接的でしかも強い。それは国際児の場合でも同様である。しかし、ひとたび子どもたちが幼稚園、小学校に行き始めると、家庭外からの様々な影響が入り込んでくるので、母親の影響力が相対的に弱まることになる。国際児といっても、彼等のすべてが国際学校（インターナショナルスクール）へ行くわけではなく、その大多数が普通の日本の教育を受けるからなおさらのことである。表－3で明らかなように、過半数の調査家庭が子どもを普通の学校、それも公立の学校に通わせていた。

表－3 学校選択

日本の学校（公私立）	4 1	（ 7 7 %）
国際学校	6	（ 1 1 %）
国際学校から日本の学校	2	（ 4 %）
日本の学校から国際学校	3	（ 6 %）
国際学校と日本の学校	1	（ 2 %）
合 計	5 3	（ 1 0 0 %）

国際学校に子どもたちを通わせない理由はいくつかあるが、それは経済的、実利的なものによる。つまり、国際学校は授業料が一年に百万円以上もかかり、しかもそれはすべての都市にあるわけではない。国際学校は、東京、横浜、神戸などの大都市の中心地に位置していることが多いので、例えのその都市に住んでいても長時間の通学が必要となる。また、日本に住んでいるのであるから、日本の学校へいくべきであるとする親たちが多く、特に漢字の学習は小学校からはじめなければならないと信じている親がほとんどであった。

(2) 外人いじめ

国際児が普通の小学校へ通いはじめると様々な新しい経験をし、それに伴う外的要素が国際家庭に浸透することになる。調査家庭の親たちは異口同音に、日本の学校教育では小学校が最も優れていると述べていた。ところが、皮肉なことにその小学校入学後、国際児たちが決まって経験する難事がいじめである。最近いじめが社会問題化しているが、調査した国際児の多くも何らかのタイプのいじめを経験していた。彼らのほとんどが、茶色い髪の毛をしていたり、また目が大きくて顔つきが違うので、外国人としてみられ、一般のこどもたちに排他的な扱いをうける。外人いじめと呼ばれる所以である。

いじめが原因で起きた最近の自殺ケースからもわかるように、一般のこどものいじめ問題が最も深刻化するのは中学校の時である。森田と清永〔1994：64-68〕も「中学で深刻化するいじめ」としてその実情を分析している。しかしながら、私の調査によれば国際児に関するかぎり、彼らが外人いじめに最も多く遭遇するのは小学校の時期である。インタビュー当時19才のエイミーは小学生の時の経験をつぎのように回想していた：

小学校の一年から三年くらいまでが一番つらかった。日本語は十分にできないし、いじめにはあうし...あの頃のこどもってまだ人の心を思いやるなんてしないでしょう。だからいつもわたしのこと、外人、外人って...

エイミーの経験からもわかるように、外人いじめは小学校の低学年の時が深刻で、高学年に近づくとき徐々になくなっていく。12才のマリは過去を思い返してつぎのように述べた：

一年生の時は、「外人、外人」って言われしょっちゅう泣いてました。でも今はそんなことはありません。四年や五年生の時に、下級生に「外人」っていわれたことがあったけど、そんな時何ばかなこと言ってるのと思って無視しました。六年になったら、もう誰も、何も言わなくなった。

外人いじめはことばによるものだけではなく、身体的な暴力をも伴うことがある。16才の洋子も幼い頃の経験を次のように語った：

いじめられたのは、小学校のころが一番ひどかったと思います。半分アメリカ人ということで随分やられました。学校へ行くと、「外人、外人」っていわれ、「お前なんか来るとこじゃない。ここは日本人の学校だ」とか言われたこともあります。悪いことを言われるだけじゃなくて、石を投げられたり、男子トイレに引っ張り込まれたこともあるんです。

森田と清永〔1994〕も指摘しているように、一般には人権意識の向上に伴い、あからさまに差別意識や偏見をむきだしにしたいじめは以前にくらべて少なくなっているが、こどもたちの間では陰湿ないじめがあとをたたない。しかしながら、この「外人いじめ」が長年にわたって継続するわけではない。中学生になると、「英語ができる」「外見がかっこいい」などの理由から国際児が人気者になるケース

が多い。小学校低学年の二、三年間に国際児の多くが経験するいじめは彼等にとって試練の時期であり、親たちのなかにはそれをこどもの「洗礼」や「通過儀礼」として見ていた者もいた。

(3) いじめと兄弟姉妹差

二人以上のこどもを持つ親たちとの聞き取り調査で明らかになったことは、国際児の多くは一樣に小学校で外人いじめを経験するのだが、その心理的インパクトは兄弟姉妹によりかなり違うことである。男女差にかかわらず一般に、第一子の方が第二子、第三子よりいじめから受ける心理的影響は大きい。このことについて、三人の成人した息子を持つリンダは彼らのいじめ経験についてつぎのように回想している：

小学校の時の様子なんかを一郎と話すと、あの子は「そんなこと知らないよ」とか「違うよ、ママ」とか言って否定したり、隠したりするんですが、一郎はそれはつらい目にあっています。最初のこどもの場合、決まってそうなんですが、あの子に対する学校でのいじめはそれはひどいものでした。まわりのこどもたちは、彼を蹴ったり殴ったり、お弁当にいたずらしたり、そのやり方といたら、本当に陰湿的で暴力的でした。それに比べると、二郎や三郎の場合は比較的楽でした。

一方、息子のレオとその妹のマリの経験について、彼らの両親であるバーバラと武雄は違いをつぎのように話していた。

- 武雄 問題の出方はこどもの性格にもよると思うけど、レオはどちらかというと、神経質で感じやすい方だから...
- バーバラ そう、下の子に比べるとそうした傾向が強いわね。でも、マリだって同じようにやられていたわ。いつもぶんぶん怒っていたもの...
- 武雄 ただね...
- バーバラ いいえ、同じように外人いじめを受けて、それはひどく怒ってました。ただ、レオの方は泣いて引き下がるのに対し、マリは必ずやり返し、怒鳴り返してたのよ。
- 武雄 そう、それを（ぼくも）いいなかったんだよ。
- バーバラ 怒り狂ったように、よく金切り声を上げてたわ。でも、あれ、好きでやってたわけじゃないのよ。
- 武雄 分かってるよ。要するに、こどもによって反応が違うということを、ぼくは言いたいんだ。

ではなぜ、兄弟姉妹間にこのような違いが見られるのであろうか。その要因の一つとして考えられるのは第一子と第二子（およびそれ以降）との間に見られる性格的行動上の差であろう。Sutton-Smith と Rosenberg の研究によると、第一子に見られる行動上の問題は「内向的」性格によるものが多いのに対して、第二子以降の問題は「外向的」性格に端を発したものが多い [Sutton-Smith and

Rosenberg, 1970〕。内向的性格を持つ傾向があるとされる第一子の国際児は、従っていじめの経験から心理的、情緒的影響をより受けやすいと思われるのである。

もう一つの要因として、上の子の弟や妹に対する感化、影響であろう。国際児の中には英語を話せることが外人いじめの原因の一つであるとして英語を話さなくなる者もいたが、これとの関連で、六人の子の母であるナンシーはつぎのように述べた：

上の子と違って、いま12才の娘は英語を話すことをそれほどいやがらないんです。そのわけは、私、下の方にいるこの子は、差別とかいやな思いをしないですむからだと思うんです。上の子たちはそれぞれ、いやな体験をしなければなりません。でも、この12才の子は、上の子たちから精神的な支えを受けているようです。

最近のいじめ研究でも、いじめと兄弟姉妹数との関連性が指摘されている。例えば、森田と清永（1994：89）は両者の関係についてつぎのように結論付けている：

兄弟が多ければ、人格的基礎を形成する家族集団のなかで複数の錯綜する人間関係の葛藤と調整を日常的に経験することによっていじめへの耐性を培うことができる。さらに、弱者へのいたわりや、弱者・強者というさまざまな力関係にある人間をまとめあげていく能力なども、家族という基礎集団のなかで体得していくことができよう。

(4) 性差別について

外人いじめは小学校の高学年で通常解消されるようだが、それとは別に母親たちが問題としたことがらに性差別がある。国際児を普通の日本の学校に通わせることにより、彼等が望ましくない価値観を身に付けてしまうことへの懸念である。特に女性の権利がより確立され、彼女たちの社会進出が日本よりはるかに発達しているアメリカ出身の母親たちにとって、この問題は重要なようだ。娘を持つ親たちにとっては、特に将来日本で就職する時に差別されるのではないかとという心配もある。

娘二人と息子一人を持つアメリカ人母親ジェーンは、こどもの就職時の差別問題についてつぎのように考えている：

日本には女性に対する差別が厳然としてあります。女性だからという理由で、お給料が安かったり、そのほかいろいろありますね。ですから、女の子たちには、今のうちに英語をしっかり勉強しておきなさいって、口をすっぱくして言うんです。日本の社会で女性が働き、生きていこうとすれば、英語が特に力強い味方になってくれますし、英語をマスターしていれば、高いサラリーもいただけるんだからってね。

性差別意識に関する母親たちの懸念は別段娘を持つ母親だけに限られたわけではない。三人の息子を持つリンダも、日本の学校のマイナス面を指摘してからつぎのように話した：

私はこどもたちに、男も女もわけへだてなく、お互いを尊重する形で接してもらいたいと思っています。すし、男の方が女よりすぐれているといった考え方の影響をうけてもらいたくないと念じているんです...私は、女性に対するマナーについてはやはり、欧米のきちんとしたスタイルを身につけてほしいと思っています。日本社会に一般的に見られる性に対する態度というのは、女性の立場から見て、決して良いとはいえませんから。

このように見ると、国際児はアメリカ人母親により日本だけでなくアメリカにおいても必要な社会的知識や内面的性向を植え付けられていることがわかる。

6. おわりに

本論では調査した国際児のバイリンガル能力が一般的に高いことを示した。それは母親たちの母国語である英語による子育ての心理的、社会的重要性が大きな要素となっているからである。同時にそれは、国際語としての英語であるからであり、それを充分意識した母親たちのこどもの将来に対する配慮がうかがえる。その意味では、真の国際児を育てるという自覚もあるようだ。実際に私がインタビューしたり、また個人的に知っている国際児の中には、日米をまたにかけて活躍している若者が多い。

また本論では、兄弟姉妹間に見られる国際児のバイリンガル能力差およびいじめの心理的影響に関する差異をも示した。一般に、家庭内における社会化のプロセスは往々にして「親と子」という単位で捉えられがちである。しかしながら、本論からも明らかなように、兄弟姉妹の影響も無視できない。しかし、他方で少子化が進んで、家族平均二人以下という日本では兄弟姉妹がお互いに社会化のプロセスで与える影響力が弱まっていることは確かであろう。この点に関して Tobin 等は、日本の幼稚園において一クラスあたりの園児数が多いのは、兄弟姉妹があまりいないこどもたちが他の園児たちとの集団生活での相互作用を通じて社会性を身に付けるのを助長するためであると解釈している [Tobin et al., 1989]。

本論ではまた、アメリカ人の母親がいる国際家庭を中心にこどもの社会化に関するいくつかの問題を考察した。しかしながら、このような家族はまだ少数で、大多数はアジアその他の国からの母親たちの家庭である。通常彼女たちの母国語は英語ではなく、英語のような国際語としての社会的な価値、重要性は低い。今後の研究では、欧米語以外を母国語とする母親たちはどれほどその母国語や文化をこどもたちに伝えているかという問題をも取り上げていくべきである。また社会化の視点から、兄弟姉妹関係が果たす役割などを中心とした調査、およびそれに対する少子化の影響も考察すべきであろう。それから国際結婚家族については、これまでの夫婦間の諸問題に加え、より多くの国際児問題の研究もなされなければならない。その際、欧米の親たちだけでなく、アジア諸国出身の母親、父親を含めたより広範な国際家族にも焦点をあてる必要があろう。

注

- 1) 本論の基礎となっている研究はすでに出版されている (新田, 1992) が、それは人類学博士号取得のために、1989年にハワイ州立大学に提出した英語論文 (Nitta, 1989) に手を加えて翻訳したもの

である。フィールドワークに際しては、アメリカ合衆国教育省のフルブライト博士論文海外調査プログラム (Fulbright Dissertation Research Abroad Program) から研究資金をいただいた。

2) インフォーマント名はプライバシー保護のためすべて仮名を使用した。

文 献

- De Vos, George, 1973, *Personality Patterns and Problems of Adjustment in American-Japanese Intercultural Marriages*. The Oriental Cultural Service.
- Fishman, Joshua, 1965, Who Speaks What Language to Whom and When? *La Linguistique*, 2: 67-88.
- Goslin, David A, 1962, "Introduction," in Goslin, D. A. ed. *Handbook of Socialization Theory and Research*, Randy McNally & Company.
- Grojean, Francois, 1982, *Life with Two Languages. An Introduction to Bilingualism*. Cambridge University Press.
- Hall, Edward T., 1977, *Beyond Culture*, Anchor Press/Doubleday.
- Imamura, Anne, 1982, "Foreign Wives: A Comparison Between Nigeria and Japan," *AFWJ Newsletter*, No.80: 52.
- 厚生省大臣官房統計情報部, 1994, 人口動態統計の国際比較, 厚生統計協会.
- Lincoln, Peter, 1975, "Acknowledging Dual-Lingualism," *University of Hawaii Working Papers in Linguistics*, 7.4:39-45.
- 森田洋司/清永賢二, 1994, 『いじめ 教室の病い』, 金子書房.
- Nitta, Fumiteru, 1988, "Kokusai Kekkon: Trends in Intercultural Marriage in Recent Japan," *International Journal of Intercultural Relations*, Vol, 12: 205-232.
- 新田文輝, 1992, 『国際結婚とこどもたち』, 明石書店.
- 新田文輝, 1995, 「最近の日本における国際結婚——接近と交換理論を中心にした試論」, 吉備国際大学研究紀要第5号: 95-109.
- Passin, Herbert, 1980, *Japanese and the Japanese*, Kinseido.
- 佐藤隆夫, 1989, 『農村と国際結婚』, 日本評論社.
- Schmidt-Mackay, Ilonda, 1977, "Language Strategies of the Bilingual Family," in Mackay, W. F. and Andersson, T. (eds.), *Bilingualism in Early Childhood*, Newbury House Publishers.
- 宿谷京子, 1988, 『アジアから来た花嫁』, 明石書店.
- Sutton-Smith, Brian and B.G. Rosenberg, 1970, *The Sibling*. Holt, Rinehart and Winston.
- Tobin, Joseph, David H.Y. Wu, and Dana H. Davidson, 1989, *Preschool in Three Cultures. Japan, China, and the United States*, Yale University Press.

(にった ふみてる・吉備国際大学)

Socialization of "International Children"

— Linguistic Socialization and Sibling Differences —

Fumiteru Nitta

Key words : international marriages, international children, socialization

A recent characteristic of "international marriages" in Japan is that more Japanese men marry foreign women than vice versa. As this type of marriage increases, so does the number of children with Japanese fathers and foreign mothers. The purpose of this paper is to examine socialization issues of these international children who have Japanese fathers and foreign mothers.

Within the family, parents are faced with the issue of linguistic socialization as to what language they are to use interacting with the child. Most parents studied wanted their children to be bilingual. This is reflected in the fact that approximately 90% of their children are bilingual of some type. Differences in bilingual ability among siblings and issues related to linguistic socialization are discussed.

Outside the family, when the "international child" reaches school age, the issue of what school he or she is to attend arises. The overwhelming majority of the children studied go to Japanese schools, public and private. The choice is based on economic and practical reasons. At school, many "international children" experience *ijime* (bullying). Differences among siblings with regard to the effects of *ijime* and other issues are examined.

One common feature between children's bilingual ability and *ijime* experiences is that the bilingual ability and the emotional impact of *ijime* vary among siblings. Implications and suggestions for future studies are also discussed.

Relationships between the Social Attitudes of Parents and Children

— Japan in the 1990's and America in the 1970's —

Fumiaki Ojima, Toru Kikkawa, Atsushi Naoi

Key words : parent-child relations, socialization, social attitudes

In this paper we discuss the relationships between the social attitudes of students aged 13 to 18 and their parents, important agents in their socialization. We use Japanese family data from the 1990's and American family data from the 1970's to compare basic features of the two societies.

Using data from the triad of mother, father and child, we focus on three social attitudes: authoritarian-conservatism, idea-conformity and self-confidence. We hypothesize that the factor structures of parents' and children's attitudes are similar. With the LISREL program we use linear structural equation modeling to test our hypothesis and to measure the correlations among different family members' attitudes.

We find different patterns of correlation among family triads in the U.S. and Japan. First, for authoritarian-conservatism the correlation among family members is positive in both countries, although all of the correlations are higher in the U.S. than Japan. Second, the only significant correlation in Japan for idea conformity is between parents, whereas in the U.S. the only significant correlation is between mother and child. Third, for self-confidence all of the correlations among the family triad are significant and positive in the U.S. sample; however, although all are positive in Japan, only the correlation between father and mother is significant.

All in all, though American data supports standard sociological theories of family, for example, Parson's theory of functions of family, Japanese data does not. This is because in the U.S. society parents' social attitudes are transmitted to their children effectively. In addition, weak correlation in Japan between mothers and children does not support the importance of "mother-child identification" in Japanese sociological family theory.